

「主体的学び」の主体性

神藤 貴昭（本学教職研究科教授 教育心理学）

学校教育にかかわる言説では、「主体性」とか「自ら学ぶ」というような言葉をよく耳にします。「自己教育力」という言葉もありました。また、近年では、「エージェンシー」という言葉も耳にするようになりました。受け身で、他者から言われるがままに学習するのはダメだということでしょう。では自分から学習すればいいのかというと、それだけでは不十分といえそうです。

観点別評価においては、「知識・技能」「思考・判断・表現」と並んで、「主体的に学習に取り組む態度」を評価することとなります。「主体的に学習に取り組む態度」を評価するさいには、「粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面」を評価する必要があるとされ、「自らの学習を全く調整しようとせず粘り強く取り組み続ける姿」は「一般的ではない」と退けられます（国立教育政策研究所『教育評価の在り方ハンドブック』）。

また、OECD においては、「エージェンシー」を「自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく力」（白井俊「OECD における Agency に関する議論について」）とし、「生徒エージェンシー」や「教師エージェンシー」のみならず、保護者等も含めた「共同エージェンシー」という概念も提唱されています。すべての人間が、立場を超えて、協働的に学び、考え、未来をつくっていくことが重要であり、学校がそのような状況の基盤をつくる場となるべきだということでしょう。「エージェンシー」においては、倫理観、責任感が重視されます。

このように、単に自ら学ぶだけではなく、「責任」「社会変革」「自己調整」を伴った主体的な学びが重要というわけです。そういう意味では、単に「楽しい」「面白い」から主体的に学ぶ、純粋な内発的動機づけは、もしかしたら、近年、軽んじられるようになったのではないのでしょうか。

「責任」「社会変革」「自己調整」を重視することは大事なのですが、これらに偏してこだわるあまり、かえって主体的でない学びになってしまっていることもあり

そうです。探究学習を例にすると、もちろんその場の思い付きの「楽しい」「面白い」だけのテーマでは、深い探究にならないわけですが、テーマ設定のところで、教師が、「責任」「社会変革」を重視しすぎて、枠をつくりすぎると、かえって、非主体的になってしまうことがあります。

また、自己調整学習を促すさいに、生徒が責任をもって自己調整ができているか、毎日教師がチェックし、不十分と判断されると、「このようにしなさい!」と詳細な指導が入る状況。これが度をすぎると、自己調整学習を他者調整で行っていることになりそうです。

もちろん、他者に頼らない「主体」は、ありえないでしょう。社会的状況の中に放り込まれた自己が、社会との対話、調整の中で、ときには「受動」的状況の中で、「主体」をつくりあげていくのでしょうか。そういう意味では純粋な「主体」はないともいえますが、ともあれ、度を過ぎると、「主体的学び」の主体性が問われそうです。

今日、学校教育において、これまで以上に、「主体性」「自己調整」「エージェンシー」が重視される背景には、いわゆる VUCA といわれる状況の存在があるでしょう。未来が見えないゆえ、お決まりのコンテンツを頭に入れるだけの学習ではダメだというわけです。さらに、環境問題や各地での紛争、「グローバルサウス」の台頭等で、西欧民主主義的な価値観が揺らいでいる、という危機感が、OECD 関連諸国を中心に高まり、もはや予定調和的に学んでいるだけでは、政治的にも経済的にも没落する、という認識が強まってきたのではないのでしょうか。

このような混迷する状況の中、何よりも、教師自身が主体的に学習する、探究する姿が大事になってきます。その姿を、子どもたちが見ています。さらに、教員研修、そして、教職大学院の在り方も問われてきます。

もっとも、それ以前に、VUCA というよりは、少しでも明るい見通しの持てる未来を、子どもたちに示すことのできる社会でありたいという気もするのですが……